Osaka University Knowledge Archive

Title	「縮約形」再考
Author(s)	岡田, 祥平
Citation	阪大日本語研究. 2006, 18, p. 49-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10908
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大日本語研究』18（2006）

「縮約形」再考
Reconsideration of “Reduction Form” in spontaneous speech

岡田 祥平
OKADA Shohei

キーワード：縮約形，音声変異，潜在的，顕在的，コーパス

【要旨】

従来の研究で「縮約形」・「（音声言語における）音変化」と呼ばれてきた現象を，言語変異現象として扱う視点を提示した上で，現象を，書記言語に取り入れられた音声変異出自と想定できる単語，顕在的な音声変異，潜在的な音声変異，音韻レベルで観察される個人的差異・偶発的現象の四つに分類でき得ることを述べた。また，その四つの分類の判断にはコーパスを使用した計量的な分析が有効であろうこと，言い間違いと音声変異には連続性があることを論じた。最後に，従来の研究では看過されていた潜在的な音声変異の記述の結果が，バリエーション理論，「発音のしやすい」音素配列についての実証的な研究，言語教育という三つの研究分野に応用・還元できる可能性を述べた。

1．はじめに

（自発的な）音声言語では，１つの語形に対して複数の音声的実現や，書記言語では生起しにくい特徴的な表現が観察される。現代日本語において，連続音声中に生起するそれらの現象（の一部）は，「縮約形」・「（音声言語における）音変化」として，音声学や日本語学の研究の対象となってきた。しかし，従来の「縮約形」・「音変化」研究を見ると，対象として扱われている現象に，ある種の「偏り」が観察されることに気付く。そこで本稿では，現代日本語における「縮約形」・「音変化」の先行研究を概観した上で，「縮約形」・「音変化」を言語変異とみなし，従来の「縮約形」・「音変化」研究とは異なる視点を，具体例や研究の手法をまじえつつ提示したい。

なお，本稿で使用されるいくつかの用語について，本稿での定義を述べておく。

まず，「現代日本語」とは，基本的には真田信治氏の指す「標準語」，すなわち「各地域で，あるいは個々人が，スタイルを軸としたフォーマル，ハイレベルのものとして志向する対象」（真田 2001）のことを念頭に置いている。

また，本稿での「音声言語」・「書記言語」・「話しことば」・「書きことば」の定義は，以下に引用する国立国語研究所編（1995）に従う。

> 「文字言語」と「書きことば」，「音声言語」と「話しことば」とは，それぞれ，その指し示す範囲が必ずしも一致しない。この報告書では，文字および音声という媒体によって表されることばとしては「文字言語」「音声言語」という用語を用い，そこに文体的な意味合いを込める必要のある場合に限って「書きことば」「話しことば」という用語を用いることにする。

2．先行研究概観と問題のありか

現代日本語における「縮約形」・「音変化」の記述的研究は，テレビの教養番組の音声を対象とした土岐（1975）を嚆矢とするものだと思われる[1)]。土岐（1975）以降，主だったところ（現代日本語における「縮約形」・「音変化」について，ある特定の現象に限定して記述したものではなく，網羅的に記述したもの）でも，石井（1984），立松（1986），堀口（1989），丸山（1989），斎藤（1991），川瀬（1992），Sato(1995)，嶺岸（1999），栗原（2000），朱（2000），土岐（2002），中村ほか（2003），福島・上原（2004），上原・福島（2005）といった研究が存在している。また，紙幅の都合上，具体的な名前を挙げることはできないが，日本語教育の音声教材・聴解教材の中には，音声言語に特徴的な現象として，「縮約形」・「音変化」を積極的に取り上げているものもある。

しかし，それらの研究・教材の多くには，問題点が二つ存在しているように思える。一つは，研究の視点の問題，もう一つは用語の問題である。

2．1．研究の視点の問題

石井（1984）は，現代日本語の音声言語における「音融合の現象には，形態音韻論ないし音韻論ないし音声学の対象に属する」と指摘をしている（石井 1984 のいう「音融合の現象」とは，一般には「縮約形」・「音変化」と呼ばれている現象に相当する）。つまり，石井（1984）は，一言に「縮約形」・「音変化」といっても，言語学的には性質の異なるものが混在していることを示唆している。石井（1984）は研究の立場・分野の観点から「縮約形」・「音変化」は多様性を指摘した文献であるが，それ以外にも同様の指摘する文献はいくつか存在している。

たとえば，斎藤（1991）は，主に発話速度の観点から，「縮約形」を「ある程度以上速

い発話において生理的な理由で生じたもの」と「スピーチレベルによって使い分けられているもの」とに二分している。

土岐（2002）は，使い手の意識の観点から，「縮約形」を「縮約形式の書き方まで定着しているもの」と「意識化されているとまでは考えにくいが，音声学的には頻繁に現れるもの」とに二分している。

上原・福島（2005）では，文体差の観点から，「縮約形」・「音変化」には，「かなり丁寧なレベルでもごく普通に使われるものからほとんど使われないレベルのものまで様々なレベルのものがあること」を指摘している。

また，「縮約形」の研究を主目的にしたものではないが，『日本語話し言葉コーパス』を利用した言語変異研究の実践を紹介した前川ほか（2003）では，「縮約形」を，現象生起の言語学レベルの観点から，音声・音韻レベルでの変異現象（長母音の短呼）と形態レベルでの変異現象（「デワ」の「ジャ」への縮約・助詞「ノ」の撥音化）とに二分している[2)]。

以上の文献では，「縮約形」・「音変化」は多様性を持っていることでは見解が一致しているものの，では，その多様性をどのような枠組みで捉えるべきなのかということについては見解の一致を見ていない。

さらに考えなければいけないことは，「縮約形」・「音変化」を記述した先行研究（2．の冒頭で取り上げた以外に，ある特定の現象について記述したものも含む）の多くは，その多様性についての言及していない，ということである（土岐 2002 のいう「書き方まで定着しているもの」しか取り上げていない傾向が認められる）。しかし，それでは，「縮約形」・「音変化」の一側面を捉えているに過ぎないのではないだろうか。また，「縮約形」・「音変化形」の多様性をどのような視点で捉えるべきかを検討した研究も，現象そのものを記述した研究の数と比較すると，多くはない。そこで本稿では，3．で「縮約形」・「音変化形」の多様性をどのようにどのように捉えるべきかについて詳述することにする。

2．2．用語の問題

従来の研究で使われ続けてきた「縮約形」・「音変化」という用語には，実は現象の本質や研究の姿勢に関わる大きな問題を含んでいると思われる。

まず，「縮約形」という用語についてである。「縮約」という用語の背景には，通常の発音，予想・期待される発音・形態（以下，この発音・形態を「原形」と呼ぶことにする）からモーラ数・音節数・音素数が減少するという「前提」が潜んでいる。だが，音声言語に観察される，1 つの語形に対して複数の音声的実現や，書記言語では生起しにくい特徴的な表現には，「縮約」という名称がふさわしいものだけではない。既に，立松 (1986), 栗

原 (2000), 朱 (2000), 上原・福島 (2005) でも指摘されているが ,(ある状況下では) 「原形」からモーラ数・音節数・音素数が増加する現象も存在している。具体的には ,「…という」(3 拍) が [ttejɯː](「... ッテユー」・4 拍),「凄い」(3 拍) が [sɯŋŋoi](「スンゴイ」・4 拍) と発音されるような場合である。しかし , このような現象については ,(一部の例外を除いて) 研究・教育の視野に入れられてこなかったように見受けられる。これは , 音声言語に観察される 1 つの語形に対して複数の音声的実現や , 書記言語では生起しにくい特徴的な表現をめぐる研究の多くが , あくまで ,「原形」からモーラ数・音節数・音素数が減ることが前提となる「縮約形」の研究として行われてきたことと無縁ではないだろう。

また ,「音変化」という用語は , 通時的な音韻変化を連想させるので , 問題があろう。音声言語に生起する発音は , 共時的には , 何かの音素が「変化」した結果生起したものではない。音声生成の際の具現形の一種として生起したものであり , 何かが「変化」した結果というわけではない。

このように ,「縮約形」・「音変化」という用語には , 現象の本質や研究に対する姿勢をめぐって , 問題を含んでいるように思える。それでは , 従来の研究で「縮約形」・「音変化」と呼んできた現象を , どのように捉え , どのように呼べばよいのであろうか。

この種の現象は , 基本的には , 同じことを言うための異なった表現 (referential sameness) である。したがって , 筆者は , 従来は「縮約形」・「音変化」という用語が使われた現象を , 基本的には言語変異 , 中でも音声変異と捉えるべきだと考えている (用語の問題は ,3. で詳述する)。このように考えることによって , 従来の研究の中心課題であった「縮約形」(「原形」からモーラ数・音節数・音素数が減少する現象) と ,「縮約形」とは言い難い現象 (「原形」からモーラ数・音節数・音素数が増加する現象), さらには従来の音声変異研究で主に扱われてきた現象 (母音の無声化やガ行鼻濁音など ,「原形」からモーラ数・音節数・音素数が変化しないもの) とを , 同種の現象と見なすことが可能になる。また ,「音変化」という用語の使用を避けることにより , 通時的な現象ではなく , あくまで調査時点での共時的現象を記述するという立場を明示することができるであろう。

以下 , 本稿では , 従来の研究の多くのように , 現象の多様性と本質を看過している場合に ,「縮約形」・「音変化」という用語を使用する。本稿の目的は ,「縮約形」・「音変化」という用語のもとに行なわれてきた研究を一度解体し , よりよい研究の視点を再構築することにもある。

3.「縮約形」・「音変化形」の重層性

3.1. 視点・立場

2.1. で触れたように,「縮約形」・「音変化」の多様性について言及した研究は,既にいくつか存在している。しかし,どのような多様性を持つのか,見解の一致を見ていない。それは,各研究者が(微妙に)異なる視点・立場から現象を眺めているためであろう。どの立場が最も優れているかという議論は生産的ではないし,異なる視点というのは,研究の多様性,多岐性,複眼性を保証する立場から,尊重されるべきである。そこで本稿では,2. で触れた文献で示されたような視点も意識しつつ,従来指摘されていなかった新たな視点を提示したい。

筆者は,2.2. で,「縮約形」・「音変化」と言われてきた現象は,言語変異,特に音声変異であると述べた。そこで,まず言語変異を観察する際に前提となる視点を確認する。

ネウストプニー(1982)は,言語変異を考える際には,少なくとも「①潜在的(covert)②顕在的あるいは行動的(overt, active)並びに③意識的(conscious)」の3種類の現象を区別する必要があると述べている。「潜在的」とは,言語の使い手が変異の存在(ならびにその変異が持つ価値・意味合い)に気付いていない場合である。「顕在的」とは,言語の使い手が変異の存在(ならびにその変異が持つ価値・意味合い)に気付いている場合である。「意識的」というのは,基本的にはLabov.Wのいう「ステレオタイプ」のことである。

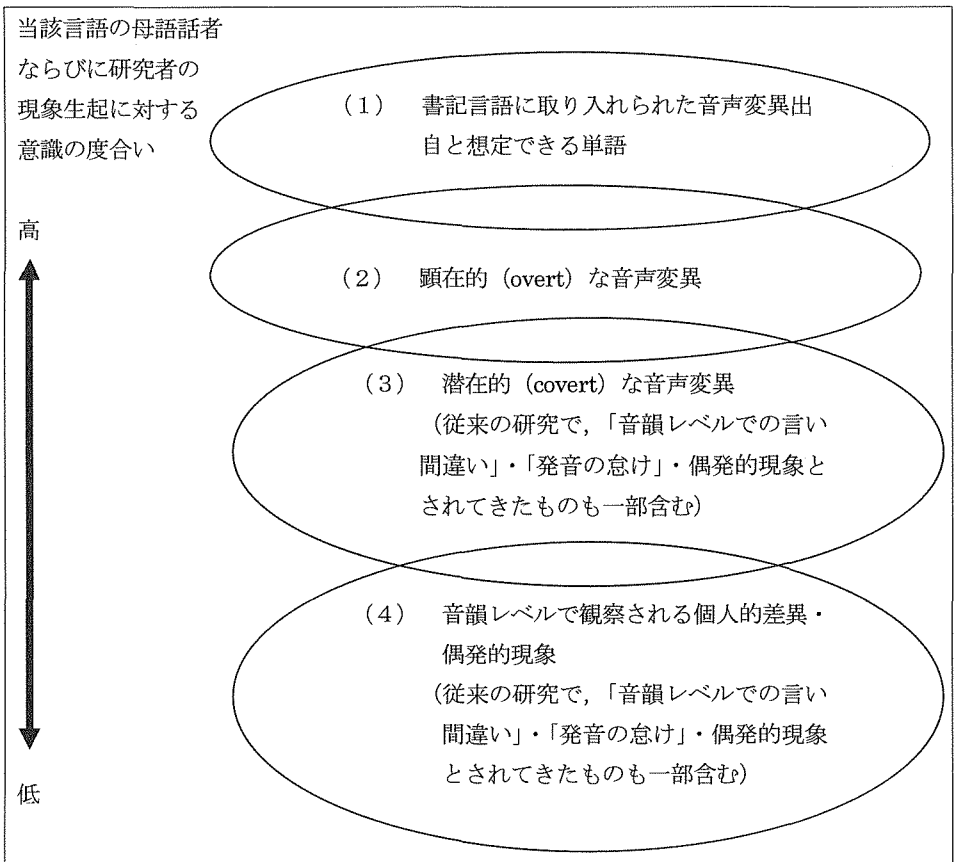
従来「縮約形」・「音変化」として一括で扱われてきた現象を言語変異として捉えるのであれば,「縮約形」・「音変化」も,少なくとも「潜在的」なものと「顕在的」なものという重層性を持つと考えるべきであろう[3)]。

ただ,「縮約形」・「音変化」現象の場合,単に潜在的か顕在的か,二分するだけでは不充分であると思われる。3.2. で詳述するように,「縮約形」・「音変化」には,音声学的な現象(音声変異というべき現象)とそうではない現象とが混在していると考えられる。したがって,「潜在的」か「顕在的」という視点以外に,音声学的な現象か否かという視点も必要であろう。

3.2. 四分類

前節で,「縮約形」・「音変化」研究が扱ってきた現象を,潜在的なものと顕在的なもの,音声学的な現象とそれ以外のものとに峻別する必要性を指摘した。具体的には,主に,当該言語の母語話者の現象に対する自覚度,当該言語の研究者の問題認識度などによって,

以下の【図 1】に示すような重層性を持っているのではないかと，筆者は考えている。ここで注意したいのは，現象を認識する主体によって，同じ現象でも分類されるレベルが異なるという点である（本節後半の議論でも詳述する）。また，【図 1】の輪の大きさとそこに分類される語彙の大きさとは関係ない。【図 1】は，あくまで模式的な図である。



【図 1】 音声変異の重層性

「（1）書記言語に取り入れられた音声変異出自と想定できる単語」（以下，「書記言語に取り入れられた音声変異」と表記する）とは，もともとは音声変異的現象であったであろうが，慣用化され，いまや書記言語の体系にも取り入れられたと想定できるものである（あくまで「想定」であり，実際はどうであったかという厳密な史的研究の成果は，ここでは考慮に入れない）。具体例としては，「てしまう」に対する「チャウ」，「では」に対する「ジャ」，助詞「の」の撥音化，二重母音 [ai] のエ列長音化（「小さい」に対する「チイセー」），などがあげられるであろう。これらは，「原形」と音声的に類似し，音声学的にどのよう

な過程を経てその形態が生まれたのかを推定できるものである。

運用面の特徴としては，音声言語の中で頻繁に使用されると同時に，小説の会話文や雑誌の対談ページなど，書記言語においても「話しことばらしさ」を演出したいときに意図的に使用される，ということがあげられる。逆に，話しことばを連想させることが許されない書記言語（論文・公文書など）では，ここに属する単語の使用は制限されるということになる。つまり，ここに属する単語は，音声言語の出現する音声変異に由来するため，必然的に文体的側面，語感としては，話しことば的な色彩を帯びていると言える。

ここに分類されるものは，使用に文体的な制約があるとはいえ書記言語にも観察されるということは，音声言語に特徴的な表現であると同時に，話しことば的な単語として書記言語の体系に組み込まれている，と考えられる。音声言語に特徴的な表現という性質から，ここに分類されるものは，従来の研究では，ともすれば音声言語に特徴的な音声的な現象として扱われる傾向もあった。しかし，これらの表現は書記言語の中でも観察されるものであるから，もはや純粋な音声的な現象ではない。ここに分類されるものは，音声学や音韻論ではなく，主に形態論や語彙論の枠組みで扱うべき現象であると考えられる。以下の小松（1981）の指摘を受けるならば，ここに分類されるものは，単なる変異（ユレ）ではなく，日本語の語彙体系の中に独立した一単語として組み込まれた，と見なすべきなのかも知れない。

> 日本語の一部の語彙には，もとになった語形と，それから変化した語形とが共存していて，丁重さや親しみの度合いに応じて使い分けられる―，あるいは，それらを使い分けることにとって，丁重さや親しみの度合いを適切に表明する―，という現象が認められる。ちょうど，「これは」[korewa] と「こりゃあ」[korja:] とか，東京方言の「行ってしまった」と「行っちゃった」とかのような関係である。

実際，ここに分類されるものの中には，「原形」と文体的価値が異なるだけではなく，異なる文法的な働きをもつものも存在する[4)]。

「（2）顕在的（overt）な音声変異」とは，音声言語で頻繁に使用され，当該言語の母語話者や研究者にはその存在が意識されているが，書記言語の体系に（完全には）取り込まれていないものである。たとえば,「場合」（[baai]）を [bawai]（「バワイ」）や [bajai]（「バヤイ」）と発音してしまう例や，現代日本語における母音の無声化の問題も，基本的にはここに該当するであろう（「基本的に」と述べた理由は，本節後半で詳述する）。

ここに分類されるものは，現段階では（完全には）書記言語に取り入れられていないも

のの，変異の存在が意識されている以上，その変異を書記言語に取り入れようという動きもあると考えられる。特に，音声言語をできるだけ忠実に反映させようとするジャンルの書記言語（小説・漫画・シナリオの会話部分，私的な電子メールなど）においては，その動きが顕著であろう。しかし，書記言語に取り入れられるか否かは，単に現象の存在を意識しているか否かだけではなく，表記・文字体系の問題，当該現象に音韻論的対立があるかないか，など，様々な要因が関係しているであろう（本稿はその要因を追究することが目的ではないので，これ以上の言及は避けることとする）。

「（３）潜在的（covert）な音声変異」とは，音声言語の中では頻繁に使用されているにも関わらず，当該言語の母語話者や研究者にはその存在が意識されていない，もしくは変異とは認識されていない（現象生起に際して特に制約がなく，ランダムに生起すると思い込まれている）ものである。意識化されていない以上，「話しことば的」などという文体的価値とは無縁である。また，書記言語の体系にも組み込まれていないという点で，まさに音声的な現象であるといえよう。

ここに分類される現象の具体例を挙げることは，実は非常に難しい。なぜなら，ここに分類されるであろう現象は，母語話者や研究者に意識されていないゆえに，記述・研究されてこなかった（記述・研究が不可能だった）からである。従来，記述されてこなかった現象の具体例を挙げることは，事実上，不可能である。ただし，方法論が確立されれば，この種の現象の記述の発展が期待できるのではないかと考えている（詳細は，４．１．での議論を参照のこと）。

「（４）音韻レベルで観察される個人的差異」とは，従来の研究で言う「（偶発的な）音韻レベルでの言い間違い」[5)・6)]や「発音の怠け」が該当する。「音韻レベルでの言い間違い」とは，「食よくの秋」と言おうとして「食よきの秋」と言ってしまうような現象を指す（用例は寺尾 1987 より）。このような現象は，生起頻度が非常に低い偶発的現象，あるいは特定の個人の発音の癖といった個別的な現象と見なせるものである。ここに分類されるものは，偶発的・個別的現象であるゆえ，（少なくとも現段階では）変異現象であると認定はできない，と考えるのが穏当であろう。なお，偶発的・個別的現象ということは，用例は論理的には無数に存在する。したがって，ここに分類される現象の具体例をつぶさに挙げることも不可能である。

以上，【図１】に示したように，従来の研究では「縮約形」・「音変化」と一括して扱われてきた現象を四つに分類する視点を提示したが，二点，付記すべきことがある。

まず，現象をどのように認識し，分類するかは，当該言語の母語話者や当該言語研究者の個人的な問題に帰すところがある，という点である。このことを，母音の無声化を例に

考えてみたい。少なくとも現代日本語の研究者や現代日本語（の音声）に関心がある人などにとっては，母音の無声化は周知の現象，すなわち顕在的な音声変異である。一方，母語話者の中には，現象の存在に気付く人（母音の無声化を音声変異として認識している人）と気付かない人（母音の無声化を音声変異として認識していない人）とに分かれるように思う。母音の無声化は，前者にとっては顕在的な音声変異であるが，後者にとっては潜在的な音声変異となる。このように，同一現象でありながら，現象を認識する主体によって，顕在的な音声現象とも，潜在的な音声現象ともなり得る。

それゆえ，【図１】の（１）から（４）の四分類は重なり合うところもあり，いわば連続的な体系であると考えられる。それぞれのカテゴリに分類される現象の中でも，その度合いに濃淡があろう。個人的差異に極めて近い潜在的な音声変異もあれば，顕在的な音声変異に近い潜在的な音声変異も存在しているだろう。同一現象でも，主体によって分類の判断が分かれる現象は，【図１】の輪の重なりに位置していると考えられる。前述の四分類の説明の中で，母音の無声化を顕在的な音声変異の具体例としてあげたが，母音の無声化現象を意識していない話者の存在も想定できる以上，母音の無声化は，厳密には顕在的な音声変異と潜在的な音声変異の重なりに位置すると見なすべきであるかもしれない。

では，ある現象をどのようにして【図１】のような連続的なカテゴリに分類するのか，という疑問が出てくるであろう。このことについては，４．で詳述する。

第二に，【図１】に示した音声変異の重層性は，日本語のみならず他言語にも通用すると考えられる。たとえば，富士（1972）は，英語・米語の「/t/ の異音の中で Glottal stop」は「筆者自身の観察，native speakers に対するアンケート，諸学者の意見などを総合して判断を下すと，この発音は現在一般には standard の status を与えられていないにもかかわらず，実際には相当数の人々によって無意識的に使用されているのである」と述べている。英語・米語における /t/ の異音としての [ʔ] は，「相当数の」母語話者にとっては潜在的な音声変異というべき現象であろう。

４．四分類の問題点

２．１．で，「縮約形」・「音変化」にはタイプの異なるものが混在していることを指摘し，３．２．ではそれらの現象を四つに分類する視点を提示した（【図 1】）。しかし，その分類には，いくつかの大きな問題点を含んでいる。本節ではそれらの問題について詳述する。

4．1．分類・認定基準の問題―コーパスの可能性―

まず，どのような基準で【図 1】に示した四つに分類・認定していくかは，大きな問題であろう。しかも，3.2. で述べたように四分類は連続した体系である。連続したものを分類することは非常に困難な作業である。

まず，書記言語に取り入れられた音声変異であるが，いくつかの具体例はあげることが可能であるものの，ここに属するものを網羅したリストは，管見の限りでは存在しない。したがって，ある表現・単語が，ここに属するのか，それとも，ここではなく音声変異に属すると考えるべきなのか，判断に迷う場合も出てくる。たとえば，「私」に対する [ataçi]（「アタシ」），「あなた」に対する [a:ta]（「アータ」）などは，書記言語に取り入れられた音声変異と見なすべきなのか，音声変異と見なすべきなのか，にわかに判断がつかないのではないか。

しかも，一言に書記言語と言っても，論文・公文書といった非常に書きことば的なもの（文体的に硬いもの）から，小説・漫画の台詞，インターネットの BBS や電子メールといった非常に話しことば的な色彩が濃いもの（文体的に軟らかいもの）まで，多岐にわたる。どの種の書記言語にどの程度取り入れられたらここに属するものといえるのか，議論が分かれるであろう。

また，ある音声変異が「顕在的」か「潜在的」か，あるいは「偶発的」かという判断基準の設定も，非常に困難である。

偶発的現象は，いわば「1 回きり」の現象なので，「偶発的現象は，顕在的あるいは潜在的な音声変異ではないもの」という「引き算的」な手法で認定せざるを得ない。つまり，偶発的現象を認定するには，まず，顕在的な音声変異と潜在的な音声変異を認定する必要がある。

顕在的な音声変異とは，従来の研究で取り上げられてきた現象である。したがって，やや曖昧ではあるが，「言語学関係の出版物にあたり，そこで取り上げられている（取り上げられてきた）もの」（松田 2001）を顕在的な音声変異として認定すればいいだろう。ただし，何らかの文献で言及があったとしても，「こういう場合もあり得る」といった漠然とした日々の観察の結果ではなく，当該現象が変異現象として取り上げられ，記述・分析されていなければならない。日々の観察レベルの記述は，研究者が偶然遭遇した個人的差異の記述に過ぎない可能性もあるからである。

一方，潜在的な音声変異は，当該言語の母語話者（や研究者）に存在が意識されていない現象である。その存在が意識されていない現象を何らかのカテゴリに属すると認定することは不可能である。そういった意味で，松田（2001）が冒頭に「変異の発見」という

章を置き，「変異を分析するには，まず変異現象を発見しなければならない」と述べているのは，非常に示唆的である。ある現象を潜在的な音声変異と認定し，記述・研究の対象とするには，少なくとも当該言語の研究者が，まず，何らかの手法をもって潜在的な音声変異の顕在化，という作業をしなければならない。

しかし，潜在的な音声変異の顕在化をどのように行うかも，なかなか難しい問題である。たとえば，従来は看過されていたある種の現象について，ある注意深い研究者が自身の日常の観察レベルで「多くの人々の間に観察される音声変異なのではないか」と問題提起を行ったとしよう。だが，何らかの証拠・データを提示しなければ，結局偶発的現象と見なされたままで，変異として認識されないということもあり得ることであろう。

書記言語に取り入れられた音声変異か音声変異か偶発的現象かの判断基準として，各種辞典（国語辞典，発音・アクセント辞典，俗語辞典など）に言及があるかどうか，立項されているかどうか，というのは一つの手段にはなり得ると思える。しかし，話はそれほど単純ではない。なぜなら，見坊豪紀氏が書いた『三省堂国語辞典　第三版』の序文の冒頭の有名な一節に象徴されるように，「現代のことばを収めると標榜する辞典において，どの程度，共時態的であるか，というと問題がないわけではない」（白藤 1995）からである。辞典の記述に何らかの判断基準を求めるということは，結果的に，辞典の編集者の編集方針という主観に判断基準を求めることになる。そもそも，変異を四分類することは，研究者個人の内省で判断基準を設けることが難しい事象である。したがって，辞典は判断基準にはなりえないだろう。

このように見ていくと，何らかの方法論を構築しない限り，ある単語が【図１】の四分類のどこに属するかを（ある程度）客観的に判断することは非常に困難だということに気付く。【図１】で示したような重層性は，実際には，既に多くの研究者が意識している事項ではあると思われる。しかし，その重層性に則った記述・研究が少ないのは，以上で述べたように，明確な分類基準を立てることができなかったことにも起因するのかもしれない。

それではどのような解決策が考えられるであろうか。分類基準の問題を解決する方法として，コーパスを利用し大規模データを計量的に記述するのが，現段階では最善ではないかと筆者は考えている。田野村（2000）などが指摘しているように，研究者個人の内省で判断が難しい事象は，コーパスを利用すれば解決できることも多いからである。

近年，コーパス言語学の興隆の流れを受けて，様々な種類のコーパスが作られ，公開されるようになった。現代日本語でも，書記言語については，「九十年代になって，研究利用目的に大規模なコーパスが次々に入手可能になった」（松本 2003）。また，高性能のパ

ソコンが比較的安価で入手できるようになった現代では，相応のコンピュータの技術があれば，書記言語のコーパスを一個人で自作することも可能である。一方，音声言語については，従来は音声学的な分析が可能な高音質のコーパスは存在しなかったし，一個人で音声学的分析にも耐え得る大規模データを構築することは困難であった。しかし，2004 年，日本語の音声言語について，音声学的な分析が可能な高音質を保証した大規模自発発話音声コーパスである『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese，以下，英略称 CSJ と表記する）が公開された（CSJ の詳細は前川 2004 などを参照のこと。また，CSJ に格納された音声が真田 2001 のいう「標準語」であることは，岡田・出野 2005 で詳細に論じている)。このように，現代日本語研究においては，書記言語，音声言語双方とも，コーパスを利用できる環境が整いつつある。

それでは，書記言語，音声言語双方のコーパスをどのように活用すれば，ある程度客観的に【図 1 】の四分類を意識した記述・研究が可能になるであろうか。

先に，現段階では，書記言語に取り入れられた音声変異のリストが存在しないことで生じる問題点を指摘した。しかし，これは，書記言語，特に話しことば的な特徴が強い書記言語[7]のコーパスで出現した語彙のリストを作成する一方，音声言語のコーパスで出現した語彙のリストも作成し，双方の語彙リストを比較対照することで，問題はある程度解決できるのではないか。双方に出現した単語で，なおかつ音声変異と想定できる単語が[8]，書記言語に取り入れられた音声変異といえるであろう。

一方，潜在的ゆえに従来は記述されてこなかった変異現象として記述されてこなかったものについては，筆者が CSJ を利用し，これまで，子音「脱落」[9]（岡田 2003a・b)，撥音から「長音」[10]への「言い間違い」（岡田 2003c)，無声化した母音の「促音化」[11]（岡田 2004a)，外来語における母音連続 /ei/ の発音（岡田 2004b)，助詞「を」の発音（岡田 2005a)，平叙文末の「デス」・「マス」の「ス」の母音の非無声化（岡田 2005b）といった言語変項を見出してきている。これらは，従来は偶発的現象や「言い間違い」，特定話者の発音の癖などと見なされ，変異としては扱われてこなかった現象である[12]。しかし，CSJ を利用して分析した結果，生起確率は低いものの，決して偶発的に生起するのではなく，ある種の言語外的条件・言語内的条件が影響を与えていることが明らかになった[13]。

ただ，たとえコーパスを使用した計量的な記述の結果をもとに，四分類を行ったとしても，いくつかの問題は残っている。

第一の問題点は，どのような計量的な観点を重視して，（偶発的現象ではなく）潜在的な音声変異と認定するのか，ということである。

変異を計量的に記述する際の観点としては，大きくは，①現象の生起度数，②現象の生

起確率，③現象を生起させた人数（分析対象者のうち，当該現象を生起させているのは何人か），もしくは人数の割合（分析対象者のうち，当該現象を生起させているのは何％か），という三つの数字が考えられるであろう。

常識的には，現象の生起度数や生起確率の数字が高ければ，偶発的現象である蓋然性が低い（結果的には，変異である蓋然性が高い）といえるであろう。しかし，双方の数字とも当該形態の総出現回数に左右されるので，実際は有効な基準とは言いがたい。そもそも，生起確率が高いものは変異と見なして記述の対象にする一方で，生起確率の低いものは偶発的現象と見なして記述の対象に含めない，というのは問題があろう。なぜなら，生起確率というのは，通時的に見れば可変的なものだからである。たとえば，ガ行鼻濁音のように，かつては生起確率が高かったものの，現在では低くなりつつある現象（たとえば井上1998）も，変異現象として記述され続けている（最近の研究としては，轟木・河野2004があげられる）。そうであるなら，逆に，現在は生起確率が低い現象も，記述の対象に含めるべきであろう。現在は生起確率が低い現象のいくつかは，将来，生起確率が高くなり，ひいては言語変化に到る蓋然性もあると考えられるからである。そのような現象の「開始点」での実態のデータを残すという観点から，現時点で生起確率が低い現象を，変異ではなく偶発的・個別的と見なして記述の対象に含めないというのは，問題があろう。

このように考えると，生起度数や生起確率を基準にするのには，問題があるようである。それゆえ，筆者は，現象を生起させた人数，もしくは人数の割合を最も重視すべきだと考えている。この数字が高いということは，（生起度数や生起確率はともかく）少なくとも当該現象が複数の話者に共有されているということを意味する。したがって，たとえ生起度数や生起確率が低いといえども，話者の個人的な癖という可能性は否定される。

ただ，現象を生起させた人数，もしくは人数の割合を重視すると，生起度数や生起確率が極端に低くても多くの話者の音声言語に観察される現象が，音声変異なのか，それとも何らかの要因が働いて，偶発的現象が同時多発的に生じただけなのか，についての判断がつきにくいという問題がある（これは，書記言語の場合でも同様で，生起度数や生起確率が低くても多くの書き手の書記言語に観察される現象を，書記言語に取り入れられた音声変異と見なしてもよいのか否かの判断は，分かれることであろう）。だが，何らかの現象が生起頻度は低いものの複数の話者に同時多発的に生じるというのは，「音声変異現象の開始点」・「音声変異が書記言語に取り入れられる開始点」である可能性も否定できないのではないか。それゆえ，生起確率は低いものの多くの人間が生起させた現象も，記述する価値はあると筆者は考える。

まとめると，当面は，複数の話者に観察されるということだけを重視し，音声変異，も

しくは書記言語に取り入れられた音声変異である蓋然性がある現象を抽出し，くまなく記述することが肝要だ，ということになろう。このような観点からの作業を通して，ベースとなるデータを記述したのち，生起度数や生起確率の関係など，詳細な検討をするべきであろう。このようなデータが蓄積することによって，将来的には，生起確率がどれくらいあれば潜在的な音声現象から顕在的な現象へと変貌するのか，さらには音声変異が書記言語に取り入れられる要素は何なのかといった，【図１】の重層性を分類する際の計量的な理論を打ち立てることも可能になると考えている。

コーパスを使用する第２の問題は，その性質上，個人の意識や精緻な使い分けを記述するのは不向きである，という点がある。そのような研究をするのであれば，コーパスとは別個に，独自のデータを収集する必要がある。日本語の音声変異の研究であれば，まず，CSJ のような高品質大規模音声言語データベースを利用し，日本語話者の傾向をある程度把握した後，必要に応じて個人でデータを収集し，話者の意識を含めた精緻な記述をするべきだと考えている。

最後に，同じコーパスを使って同じ言語変項を分析しても，分析の観点が異なれば結論が異なるという事態が生じる可能性がある，という問題もある。ただ，これは，コーパスを使用した言語研究の短所ではなく，以下の日比谷（2003）でも指摘されているように，長所である。

> コーパスの利点は，変異，とりわけ文法変異の分析に十分な量のデータを提供してくれることだけではない。もう一つ忘れてはならないのは，公開されたコーパスがもたらす追試の可能性である。複数の視点から，同じデータを検討することによって，変異研究の一層の進展が期待される。

同一資料を使用し，複数の視点から現象を記述することによって，より多角的で立体的な記述が可能になると思われる。

４．２．音声変異と言い間違いの連続性を認めることの妥当性

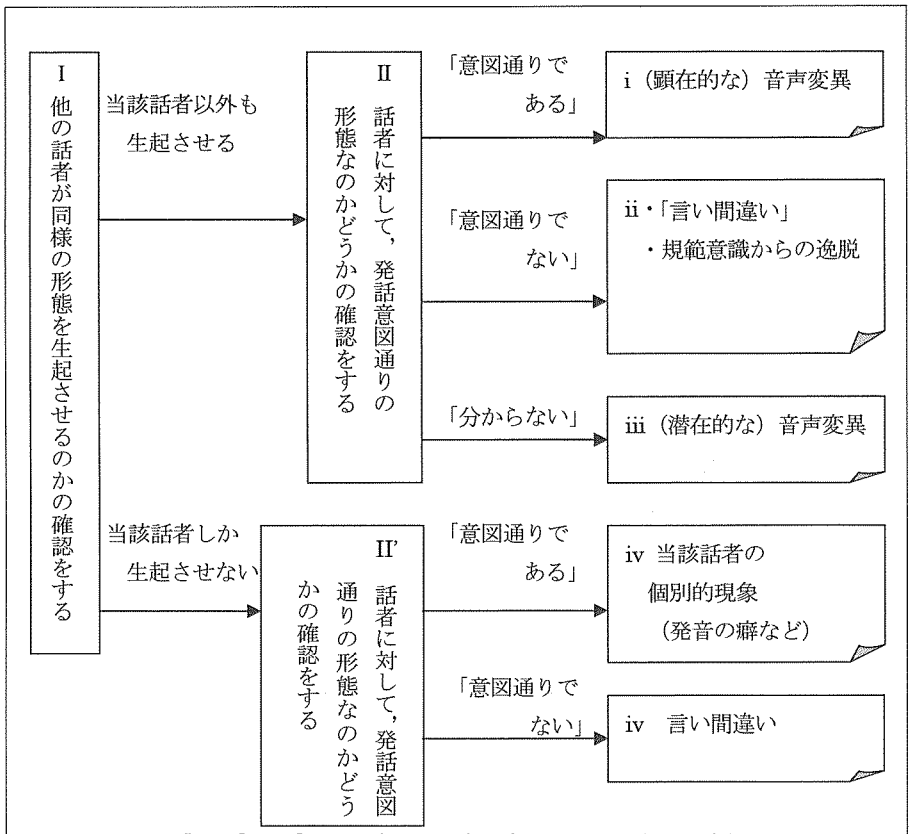
【図 1】では，音声変異と言い間違いとの間に連続性を認めているが，変異と間違いを同一レベルで論じるのは，一見問題がありそうである。しかし，言い間違いの定義を詳しく検討すると，言い間違いと変異との連続性が見えてくる。

日本語の言い間違いを精力的に記述・研究している寺尾康氏は，言い間違いを，「成人の，健常な言語能力を持つ日本語を母語とする話者が，故意にではなく行った，発話の意

図からの逸脱を指す。読み間違いやごく打ち解けた場面での不正確な発音はこれに含めない」と定義している(寺尾 2002)。

しかし寺尾氏の定義では,CSJのような大規模データを計量的に記述した場合に,判断に迷う場合が出てくる。たとえば,学会発表というフォーマルな場で,「けれど」と言おうとして複数の人間が複数回にわたって[ke:do](「ケード」)と言ってしまう場合が観察される(岡田 2003a)。それは,言い間違いであろうか。それとも,変異現象なのだろうか。フォーマルな場である学会発表で生起したものであるから,「ごく打ち解けた場面での不正確な発音」とはいえず,言い間違いのように思える。その一方で,言い間違いと見なすには生起確率が高く,生起人数も少なくはない。このように考えると,言い間違いと言語変異を峻別するのは,実際はなかなか困難であることに気付く。

特に計量的な記述の観点から言い間違いと音声変異を厳密に区別するには[14],おそらく【図 2】のようにいくつかの段階を踏む必要があると思われる。なお,【図 2】は,問題となる現象が複数の書記言語(特に書きことば的な特徴が強いもの)に観察されていない,ということが大前提として存在している。複数の書記言語に確認された現象は,それが目新しい形態であったとしても,音声変異ではなく【図 1】でいう書記言語に取り入れられた音声変異に該当すると考えられる。



【図２】　「言い間違い」と音声変異とを区別する手続き

【図 2】を，先にあげた「けれど」を [ke:do] と発音している場合を例に考えてみよう。

まず，1 番目の段階として，当該話者以外にも同様の形態を生起させるかどうかの確認である (I の段階)。計量的な記述の観点から言い間違いと音声変異を区別する手順の 1 番目にこの基準を上げたのは，前節で述べたように，計量的に音声変異か偶発的現象かを区別する基準としては，現象を生起させている話者の数・割合を重視すべきだという事情による。

「けれど」を [ke:do] と発音している場合，岡田 (2003a) によると複数の話者が生起させているので，少なくとも当該話者の個別的現象の可能性は否定される。しかし，言い間違い・個別的現象が同時多発的に複数の話者に発生しているのか，言い間違いではなく音声変異なのかの判断がつきにくい。そこで，次の段階として，話者の発話意図の確認である (「II」)。心理言語学的観点からの言い間違いか否かの区別の基本は，寺尾 (2002) でも強調されているように，あくまで話者の発話意図からの逸脱の有無にある。そこで，当該話者に「あなたは『ケレド』を [ke:do] と発音しようと思っていたか」と確認を取る必要があ

る[15]。ここで，肯定の回答が得られた場合は，発話意図通りの形態が実現されといえるので言い間違いではなく音声変異だということになる。しかも，当該話者は [keːdo] を発話意図の段階から意識していると考えられるので，少なくともこの話者は [keːdo] という形態の存在を意識し ,[keredo] と [keːdo] を発話意図の段階で選択しているといえる。つまり，この段階で肯定の回答が得られた場合は，少なくとも当該話者にとって当該現象は顕在的な音声変異だということができるであろう (【図 2】の i)。一方，否定の回答が得られた場合は，発話意図からの逸脱があったと言えるので，言い間違いということになる。

ただ，この段階での否定の回答が得られたと言って，即座に言い間違いと認定することは早計であろう。というのも，否定の回答が発話意図からの逸脱ではなく，規範意識からの逸脱を意味する可能性もあるからである。つまり，「ケレド」の発音は [keredo] であって [keːdo] ではないから ,[keːdo] と発音したのは意図通りではない，と答える可能性もある。この例のように，特にその話者が聞き慣れない形態については，発話意図ではなく規範意識と照合した結果「発話意図通りではない」と答える場合があることは想像に難くない。このように考えると，「II」の段階の否定の答えには，心理言語学的な意味の言い間違い (発話意図との逸脱) と，「規範意識からの逸脱」が混在している可能性は否定できない。後者の場合は，発話意図からの逸脱が確認されない以上，言い間違いだとは言えない。そして，前者の場合も，複数の話者にも同じような発話意図の逸脱が見られるということは，心理言語学的には言い間違いであったとしても，計量的記述の立場からは単なる偶発的・個別的現象ではなく，何らかの理由や必然性が存在していると考えるべきであろう。そのような現象を，言い間違いとみなし，社会言語学的，あるいは音声学的な分析の対象から除外してしまうのは，問題があるのではないか。つまり，【図 2】の ii に分類されるのは，少なくとも計量的な記述の立場からは，いわば鍵括弧つきで「言い間違い」とも表現すべき現象か，もしくは「規範意識からの逸脱」であり，音声変異の可能性を検討する必要がある現象である，ということになるのではないだろうか。

さらに，【図 2】の II の段階には，「分からない」という回答も得られることが予想される。このような回答が得られた場合は，発話意図からの逸脱が確認できない以上，言い間違いではなく音声変異だと見なすべきである[16](【図 2】の iii)。ただ，この「分からない」という回答の意味は，二つの場合があると考えられる。

一つは，発話意図との照合作業ができない場合である。「II」の作業は，あくまで発話時の発話意図との照合することであるが，その作業は話者の内省能力に非常に左右される。というのも，通常の会話は意識のコントロールの及ばないところで進行している (寺尾 2002) からである。それゆえ，発話時の発話意図を意識し，それとの照合作業をすること

は，鋭敏な内省能力を持った話者でない限り，なかなか困難であると考えられる。それほど内省能力が鋭敏ではない話者の場合，発話時の発話意図との照合ができず，「分からない」という回答することも予想される。このような回答が得られた場合は，発話意図から逸脱したと判断できない以上，言い間違いではなく音声変異だと見なすべきであろう。

また，ここで問題にしているような音声学的な現象は，特に微妙な差異について問うことになる。[keɾedo] と [keːdo] のように音声的に類似している変異形 A と変異形 B の場合，その両者の微妙な音声的差異が聞き取れず，「分からない」と回答する話者もいるであろう。この場合も，意識のコントロールが及んでいないうえに発話意図から逸脱したと判断できない以上，やはり，言い間違いではなく音声変異だと見なすべきであろう。特にこの場合は，二つの変異形を区別できない ([keːdo] の存在が認識できない) ため，少なくとも当該話者にとって当該現象は潜在的な音声変異ということになろう。したがって，【図 2】の iii に分類されるものの一部は，潜在的な音声変異であると考えられる。

以上をまとめると，【図 2】の I の段階で，複数の話者に観察される現象であれば，II の段階の回答がどのようなものであれ，音声変異の可能性を考えてみる必要性がある，ということになる (これは，4.1. で述べたことの再確認に過ぎない)。II の段階は，問題となっている現象が【図 1】の四部類のどこに分類されるのか，精緻な記述を行う際に有用なものと考えられる。

なお，【図 2】の「II'」は，当該話者しか生起させないと見なされた現象が，言い間違い・偶発的現象か，それとも個別的現象・発音の癖かを判断するものである。当該話者の個人的な現象にも，言い間違いと，その話者特有の個別的現象というものに分けることができよう。ある特定の話者にしか観察されない現象で，発話意図通り，もしくは発話意図から逸脱したかどうかは分からないという場合 (【図 2】の iv) であれば個別的現象，特に一般的には誤用とされるものの，当該話者にとっては正用であるような場合が該当するであろう [17]。なおかつ当該話者の発話意図通りでないとすれば (【図 2】v), それは見せ掛けではなく正真正銘の言い間違いである (II' 以降の手続きについては，さらに精緻な段階を踏むべきであろうが，特定話者に観察される現象の細分類をすることは本稿の主目的ではないので，これ以上の詳述は避けることにする)。

以上，主に計量的な記述の観点から，音声変異と言い間違いを区別する手順を述べてきた。その手順に鑑みると，言い間違い音声変異にはある程度の連続性が認められる，とは言えないだろうか。同じ発話意図からの逸脱という現象であっても，当該話者にしか観察されない現象であれば正真正銘の言い間違いであるが，複数の話者に観察されるものであれば音声変異である可能性を考慮に入れるべきであろう。

さて，言い間違いと変異の連続性を認めることは，特に音声学の研究対象が広がることを意味していると考えられる。

言い間違い研究は，主に心理言語学の分野で展開されてきた。心理言語学は，音声学や社会言語学が看過してきた現象を言い間違いと解釈する，見なすことで，言語産出のモデルを明らかにすることに成功してきたという功績がある（山根 2003)。また，言い間違いと変異現象，さらには言語変化の連続性については，心理言語学（言い間違い研究）の立場からは勿論のこと（寺尾 1987・1988 など），社会言語学（井上 1983 など）や日本語史研究（こまつ 1999 など）の立場からも，言及されている（このような言及は，古くは伊佐早 1953 などに見られる）。

音声研究の観点では，工学系の音声研究の多くは，常に明瞭に発音されるわけではない人間の声を機械に認識させるために，「調音結合」ともいわれる現象についても積極的に研究してきた（音声研究における工学系の研究者と人文系の研究者のスタンスの違いについては，前川 1995 などを参照）。その中には，人文系の音声研究が言い間違い・偶発的現象と見なしてきた現象も含まれているであろう（現代の音声認識技術における「隠れマルコフモデル (Hidden Markov Model:HMM)」が生まれた背景に触れているを前川 2001 も参照）。一方で，石井 (1984) でも指摘されているように，人文系の音声研究（音声学）の多くは，実際は音声言語の音声に頻発しているある種の現象を，言い間違い・発音の怠けといった偶発的なものと見なし，「看過」してきた側面はなかっただろうか。言い間違いと変異現象の連続性を認めたうえで，従来の音声学では「看過」されてきた現象について，生起実態を踏まえた上で，音声学的（あるいは社会言語学的に）再検討すると，何らかの新知見が得られるのではないだろうか。

5．おわりに　―潜在的な音声変異を記述・研究する意義―

本稿では，従来の研究で「縮約形」・「音変化」と呼ばれてきた現象を言語変異，特に音声変異と捉える視点を提示した上で，「縮約形」・「音変化」と呼ばれてきた現象には重層性があること，その重層性を意識した研究の方法論（コーパスの利用）を論じてきた。本稿を締めくくるにあたり，潜在的な音声変異を記述・研究する意義を述べたい。

潜在的な音声変異は，当該言語の母語話者は勿論，当該言語の研究者にも存在が意識されていないか，偶発的現象・言い間違いと認識されているため，研究の優先度が低い「些細な現象」のように思えるかもしれない。そのため，その種の現象を音声学的・社会言語学的に記述・研究する意義があるのか，という疑問もあろう。しかし，筆者は，ある言語

のある時点での音声言語の実態を把握するために，潜在的な音声変異を記述・研究する意義があると考えている。さらに，実態の把握が，いくつかの言語研究の分野で貢献できると考えている。

まず，言語変化のメカニズムの解明を目指すバリエーション理論への応用である。

日比谷（1988）によると，「バリエーション理論が目指しているのは，単に，我々のまわりで，現実に起こっている変化をとらえて記述することではなく，そのような変化がなぜ起こるのかについて説明すること」であるという。だが，従来の（日本語の）音声変異研究のように，主として既に変異と認識されている現象（顕在的な音声変異）の研究だけでは，「変化がなぜ起こるのか」というという疑問に対して一面的な説明しかできないのではないか。言語の歴史に鑑みると，個別的現象・偶発的現象に過ぎなかったものが音声変異になるような場合（【図 1】でいうと，下から上への「昇格」）が存在する一方で，（顕在的な）音声変異であったものが個人的差異や偶発的現象になるような場合（【図 1】でいうと，上から下への「降格」）も存在した，とも考えられる（現代日本語におけるガ行鼻濁音は，後者の現象に近いかもしれない）。筆者は，特に，現時点での潜在的な音声変異を記述したうえで，時間が経過した後，当該言語変項が【図 1 】のどこに位置付けられているかを確認したうえで，その位置付けの変遷に関与した言語内的条件，言語外的条件を明らかにできれば，言語変化のメカニズムを，よりダイナミックに，立体的に解明することができるのではないかと考えている。

次に，「発音のしやすい」音素配列に関する実証的な研究への応用の可能性である。

音韻変化や言語変化の要因としてしばしば挙げられるのが「発音のしやすさ」・「経済性」である。しかし，少なくとも，現代日本語において「日本語母語話者が発音しにくい音素配列」について，研究者の見解は一致していないのが現状であろう。近年，「発音のしやすさ」を客観的に実証しようとする動きがある（寺尾・村田 1995・1999，村田 1995 など）が，まだ発展途上の段階である。

そのような現状で，寺尾（2005）が言い間違い研究の将来への課題として，次のように述べているのは，注目すべきであろう。

> （中略）「言いやすさ」や「自然さ」などの曖昧な用語で語られる領域への踏み込みである。これらは，音韻現象や言語変化などに関与している可能性は高いにもかかわらず，具体的な形で示せてはいない。まだ仮説段階の話ではあるが，たとえば，「言い間違いは有標な（言いにくい）ものから無標な（言いやすい）ものへという方向に生じやすい」というルールのもとに研究が積み重ねられたら，近年注目されている最適

性理論（深澤二〇〇五）に代表される理論研究へも貢献が可能となるかもしれない。

寺尾（2005）の提言は，言い間違い研究のみならず潜在的な音声変異の研究にも当てはまるのではないか。潜在的な音声変異の音素配列を分析すれば，「発音のしやすい」音素配列を帰納的に提示することが出来る可能性を秘めているであろう。しかも，潜在的な音声変異は言い間違いのような個別的・偶発的な現象ではないから，より普遍的な結論が得られるのではないか。中でも，特に生起度数や生起確率が低いものの，多くの人々のあいだで観察される現象は，注目に値しよう。生起度数や生起確率が少ないということは，音声変異としては不安定（偶発的現象に近い音声変異）ということである。しかし，そのような現象が同時多発的に多くの話者に観察されるというのは，やはり何らかの理由があると考えるべきであろう。それは，各話者が「発音のしやすい」音素配列に仕立て直した結果である可能性も否定できないと，筆者は考えている。実際に，CSJ の発音の変異を概観した Maekawa(2005) では，発音の変異の多くには，特殊拍（撥音・促音・長音）や子音 /r/ の脱落が関わっている，という興味深い指摘がされている。このように考えると，潜在的な音声変異の音素配列を分析することは，音韻変化の研究は勿論のこと，言語産出を研究する心理言語学，さらには寺尾（2005）が指摘するように言語理論の研究にも，新知見を提供できるかもしれない[18]。

第三に，言語教育への応用である。大坪一夫氏は，『日本語教育事典』の「縮約形」・「促音化」・「長母音の短母音化」の項で，教師がそれらの現象について意識的に調整し，現実的・反省的知識を持つことの必要性・重要性を示唆している（大坪 1982）。しかし，実際はどうであっただろうか。確かに，日本語母語話者が意識しやすい，書記言語に取り入れられた音声変異や顕在的な音声変異（その代表例が，文字化が定着した縮約形）は記述も進み，一部の教材にはそれらの現象の存在が記述されるなど，教育の現場にも知見が生かされているようである。しかしながら，潜在的な音声変異はどうであろうか。日本語母語話者は勿論のこと，現代日本語の音声に反省的であるべき日本語教師も，潜在的な音声変異の多くを「潜在的」な存在のまま，看過しているのではなかろうか。

現代日本語の母語話者（の一部）及び研究者にとっての顕在的な音声変異（たとえば母音の無声化）は，その存在が意識されているため，教授者から学習者への，変異に関する知識の伝達がスムーズに行く。しかし，現代日本語の母語話者及び研究者の多くにとっての潜在的な音声変異（たとえば「長母音の短母音化」[19]）は，実際の音声言語の中には（頻繁に）観察されるにもかかわらず，その存在が意識されにくい。そのような現象に関する知識を，日本語母語話者の教師が学習者に教授することは不可能である。大坪（1982），

土岐（1996），崔（2003）でも指摘されているように，学習者のほうが母語話者の気付かない音声的な差異に気付いて，学習者は不必要な困惑を覚えるかもしれない。

潜在的な音声変異の記述が進むことは，音声教育・聴解教育のための基礎的資料が揃うと同時に，上述の通り，母語話者と学習者の認識のズレを埋めることにつながる。さらには，許容範囲の「音の崩れ」を提示することが可能となり，音声教育・聴解教育の教授項目の再考にもつながることであろう。このことに関連し，土岐（2005）は，以下のように述べている。

> 日本語の自然な発話資料を「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」などによって大量に調べてゆくと，ある音環境にあっては，日本語話者の例であっても相当の確率で「不全」を引き起こす場合が見られる（例えば，母音の長さなど）。これまで，学習者だから生じるとされてきた現象が，実は，日本語話者にも容易に起こることだと分かれば，それらは一部「問題項目」の上位から除外されることになり，学習者に無駄な努力を強いる必要がなくなることにも繋がる。まだまだ解明の余地がある切り口である

以上，潜在的な音声変異の研究の意義を述べたが，それ以外にも，潜在的な音声変異を記述・研究する価値を見出せるかもしれない。いずれにせよ，従来の研究では「縮約形」・「音変化」と一括で扱われてきた現象の重層性を認識し，書記言語に取り入れられた音声変異，顕在的な音声変異，潜在的な音声変異をそれぞれ区別し記述・分析してみると，新たな知見が得られるのではないだろうか。

当該言語研究者にとって潜在的な音声変異が存在しているということは，目の前に存在している研究対象，興味深い現象を看過しているということにはならないだろうか。それゆえ，当該言語の母語話者はともかく，当該言語の研究者にとっては，潜在的な音声変異が存在していないというのが理想的な状態ではないだろうか[20]。そして，CSJのような音声学的分析にも耐え得るコーパスが，潜在的な音声変異を記述・研究する際の力強いツールになり得ると考えている。

最後になるが，筆者は，「音声変異」には，分節的要素に関する現象・超分節的要素に関する現象の双方が含まれていると考えている。しかし，今回は，分節的要素に関する現象を中心に論じた。それは，現在の筆者の関心が分節的要素に関する現象に向いていることもあるが，超分節的要素に関する言及を限られた紙面上で行うのは困難だという理由もある。超分節的要素に関する現象も，今回述べたような音声変異の重層性の枠組みを持っていると考えられるが，主に分節的要素に関する現象を意識して構築した【図1】をその

まま適用することはできないと考えている。また，音声変異を考える際には，本稿で述べた潜在的か顕在的かという観点以外に，音韻論的対立の有無という観点が重要になると考えられる（前川 2002 もこのことを示唆している）が，これについては別稿で論じたい。

謝辞

本稿を執筆するに当たって，多くの皆さまから様々な場で貴重な示唆をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。また，的確なコメントをくださった２名の査読者にも，心より感謝申し上げます。

【注】

1) 土岐（1975）以前にも，「縮約形」などを記述した研究は存在している（たとえば，国立国語研究所 1955）。しかし，それらは，「縮約形」の記述を主目的とした研究ではない。そもそも，石井（1984）は，「縮約形」・「音変化」現象について，「日本語の従来の研究においては，（中略）音韻論，音声学はこの現象を顧みず，方言，歴史，文法を対象とする論が注意を向けてきてゐる」と総括している。

2) 前川（2002）では，音声・音韻レベルでの変異現象を，さらに，音声レベルの変異（母音の無声化）と音韻特徴の一部をなすものに関する変異（長母音の短呼）とに二分している。また，Maekawa(2005) では，発音の変異が，散発的（sporadic）なもの・発音の怠けと，多くの話者が存在を意識しているものとに二分している。

3) ネウストプニー（1982）によると，ステレオタイプには，顕在的もしくは潜在的な現象を伴わないものから客観的なデータに裏付けられているものまで，さまざまな範囲にわたるという。つまり，「潜在的かつ意識的」な現象も「顕在的かつ意識的な」現象も存在するということである。一方，「顕在的かつ潜在的」な現象というのは（通常）ありえない。そのように考えると，「潜在的」と「顕在的」は二項対立的な関係にあるが，「意識的」というのはその両者の上位に存在する視点，ということになろう。したがって，筆者は，「意識的」という観点を「縮約形」・「音変化」の重層性の枠組みに組み入れることは困難だと考えている。

4) たとえば，梁井（2003）は，「チャウ」には「てしまう」にはない独自の用法があることを指摘している。このようなものは，厳密にはもはや referential sameness を満たしているとはいえないので，変異ではなく別語と見なすべきであろう。このカテゴリ名に「変異」という用語を使用していないのは，このような例も含まれると考えられるためである。

5) いわゆる “speech error” “slips of tongue” は，日本語では多くの場合，「言い間違い」あるいは「言い誤り」と表現される。そして，そのふたつの日本語の表現は，同義で使われているようである。しかし，Corder(1967) 以降，第２言語習得研究では「誤り (error)」と「間違い (mistake)」とは，以下

のように区別される（ラーセン＝フリーマン 1995）。

> 間違いとは，疲労や興奮などにより，思いがけず犯す誤りのことである：この種の間違いは，直ちに自分で訂正することができる。誤りとは，目標言語規則をまだ十分にマスターしていない学習者が犯す体系的な逸脱である。この場合，学習者は，誤りを直ちに自己訂正することができない：なぜならば，誤りは，学習者の現在の L2 発達段階，あるいは潜在的な言語能力を反映しているからである。

筆者は，大人の音声言語に観察される大部分の “speech error” “slips of tongue” は，以下に引用する寺尾（1993）の見解と同様，偶発的な現象であると見なす立場をとるため，本稿では以下，「言い間違い」という用語を使うことにする（ただし，引用文中に「言い誤り」という表現が見られた場合は，原典の表現を尊重することにする）。

> 幼児の誤りはある時期（例えば幼児音の場合は 4，5 歳まで）まで繰り返し同じ要素に現れるという点で，誤りというよりむしろ，発音をしやすくするための方略とでも呼びたくなるような側面をもっている。これは後の節でふれる成人の言い誤りがその場限りの，突発的な逸脱であるのと対照的である。

なお，4．2．で詳述するように，言い間違いにも多様性が存在している。本稿では，様々な種類の言い間違いのうち，変異現象である蓋然性のあるものについて，鍵括弧を付けた「言い間違い」と表記することにする。

6) ここで「音韻レベルでの言い間違い」と限定をつけたのは，「言い誤りは，様々なタイプの誤りが，ほとんどすべての言語学的な単位（例えば，素性，音素，形態素，語等）で起こることが報告されている」（寺尾 1987）からである。本稿では，音韻レベル以外で生じる言い間違いは当面考慮に入れない。以下，本稿で言い間違いというのは，特に断りのない限り「音韻レベルでの言い間違い」のことを指す。

7) 話しことば的な特徴が強い書記言語の認定については，文体論研究の成果を生かすことができよう（たとえば樺島 1979）。

8) この条件を課すことは肝要である。なぜなら，書記言語・音声言語共通で使用される単語は膨大だからである。この条件を課さないと，書記言語に取り入れられた音声変異が膨大になってしまう。

9) 「脱落」とわざわざ鍵括弧つきで表記しているのは，共時的に子音が「脱落」したように見える現象と，通時的に音韻変化によって子音が脱落する現象（音便など）と区別する必要があると考えたからである。一見，双方子音が脱落した同一の現象に思えるが，前者と後者とでは，明らかに質的な違いが存在するであろう。2．2．で「音変化」という表現を避ける理由を説明したが，それと同様の事情である。このことに関しては，坪井（2001）での議論も参照のこと。

10) この長音には，鼻音化したものとそうでないものの双方が含まれていると考えられる。しかし，CSJ ではその区別ができる情報は付与されていないので，岡田（2003c）でも「長音」における鼻音化の

有無は考慮に入れていない。

11) 鍵括弧をつけた表記を採用したのは，子音「脱落」と同様，「促音化」でも，やはり通時的な現象（音便など）と，共時的な現象とを区別するべきだと考えたためである。

12) ただし，結果的には，潜在的な音声変異現象の中でも，その存在は意識されつつもその生起要因が明らかにされていなかった現象（【図 1】の潜在的な音声変異の上部，あるいは顕在的な音声変異と潜在的な音声変異の重なり部分に位置づけるべき現象）の記述に偏っている。

13) 岡田（2003a・b・c，2004a・b）は，CSJ の構築途上で公開されたモニター版の分析結果である。CSJ のモニター版は，本公開版と比較して，データの規模が小さい，データの精度が落ちる，付与されている情報が限定されている，などの相違がある。したがって，CSJ の本公開版で分析をやり直すと，異なる結果が出てくる可能性もある（今後，CSJ の本公開版を利用し，改めて分析しなおす予定である）。

14) 寺尾氏の定義が厳密性に欠くということではない。寺尾（2002）では，主に心理言語学の観点から，厳密に言い間違いを認定する手続きが紹介されている。【図 2】は，主に計量的な記述の観点から変異と言い間違いの区別することを主眼に置いたもので，寺尾氏（心理言語学）とは違った観点だということを，誤解がないように申し添えておく。

15) ここでは音声での実現形を問題にしているので，確認は文字提示ではなく音声提示で行うべきであろう。文字提示の場合，正書法の知識に引きずられた回答をする場合が考えられるからである。

16) 発話意図から逸脱していないとも判断できないので，このような場合は言い間違いと見なすべきではないか，という見解もあるかもしれない。しかし，そのような見解だと，発話意図から逸脱の有無に関して無関心の通常の会話も，発話意図から逸脱していないと言える確証はないので，すべて言い間違いと扱うことになってしまう。このように考えると，少なくとも【図 2】で示した手続きの中では，話者が明らかに発話意図から逸脱したと認識した場合のみを言い間違い（もしくは「言い間違い」）と判断するのが妥当だろう。

17) 具体的には，「個人レベルでの勘違い（たとえば，「よどんでいる」を「どよんでいる」と思い込んでいる人の「どよんどる！」は言い間違いとはいえない）」（寺尾 2005）のことである。

18) もっとも，この種の問題は，生理的な運動を観察すれば問題が解決されるというものでもない。たとえば坪井（2001）には，「発音運動における労力の軽減というような生理的原則を立てるにしても，実は発音しやすいとかしにくいとかいうようなこと自体心理的な要因を含み，単純に発音器官の物理的運動の問題としてだけでは記述しにくいものであることは確認しておいた方が良い」という示唆に富む指摘がある。

19) 近年になるまで，この現象の記述はされてこなかった（土岐 1975，大坪 1982 などが言及している程度である）。しかし，近年になって精力的に「長母音の短母音化」の記述が進み，生起の言語内的条件・言語外的条件が解明されつつある（たとえば，助川ほか 1999，氏平ほか 2000，日比谷 2000，前川

2002 など)。

20) 一方,母語話者は変異が顕在的であろうが潜在的であろうが日常のコミュニケーションの遂行には(大きな)影響はないので,当該言語研究者ほどその両者の区別に敏感になる必要はないのかもしれない。

【参考文献】

伊佐早敦子(1953)「はなしことば序—不整表現を中心として—」『国語国文』第 22 巻第 3 号.

石井久雄(1984)『形態結合における音融合』 文部省昭和 58 年度科学研究費補助金による奨励研究(A) 形態結合における音融合の実態およびその生起条件に関する研究 研究報告書.

井上史雄(1983)「誤用の社会言語学」『言語』Vol.12No.3.

井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』 岩波書店.

上原 聡・福島悦子(2005)「「やっぱ,丁寧に話しちゃいますんで」 丁寧体の会話におけるくだけた表現の使用」 南雅彦編 『言語学と日本語教育 IV』 くろしお出版.

氏平 明・窪薗晴夫(2000)「日本語における母音長の中和について」『第 14 回日本音声学会全国大会予稿集』.

大坪一夫(1982)「促音化」「長母音の短母音化」「縮約形」 日本語教育学会編 『日本語教育辞典』 大修館書店.

岡田祥平(2003a)「日本語話し言葉における子音「脱落」の実態—『日本語話し言葉コーパス』を資料にして—」『第 11 回社会言語科学会研究大会予稿集』.

岡田祥平(2003b)「話し言葉におけるモーラ /wa/(「ワ」)の子音「脱落」の実態—『日本語話し言葉コーパス』を資料にして—」『2003 年度日本語教育学会春季大会予稿集』.

岡田祥平(2003c)「撥音から長音への「言い間違い」現象について—『日本語話し言葉コーパス』を資料として—」『2003 年(平成 15 年)度第 17 回日本音声学会全国大会予稿集』.

岡田祥平(2004a)「「『ク』+カ行音」の「促音化」現象」について—『日本語話し言葉コーパス』の分析結果」『社会言語科学会 第 13 回大会発表論文集』.

岡田祥平(2004b)「『日本語話し言葉コーパス』に観察される母音連続 /ei/ のバリエーション—外来語の場合—」『電子情報通信学会技術報告』SP2004-25.

岡田祥平(2005a)「助詞「を」の発音は [o] か [wo] か?—『日本語話し言葉コーパス』を使用した分析—」『社会言語科学会 第 15 回大会発表論文集』.

岡田祥平（2005b）「文末位置の「デス」・「マス」の「ス」の母音の無声化―『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析―」『2005（平成17）年度日本音声学会第19回全国大会予稿集』.

岡田祥平・出野晃子（2005）「『日本語話し言葉コーパス』を用いた「標準語」の地域差研究の可能性―「やはり」の変異を例に―」『日本方言研究会第80回研究発表会発表原稿集』.

樺島忠夫（1979）『日本語のスタイルブック』 大修館書店.

川瀬生郎（1992）「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学留学生センター紀要』第2号.

栗原幸則（2000）「現代日本語会話における特徴の一考察　縮約形，談話形」『拓殖大学日本語紀要』10号.

国立国語研究所（1955）『国立国語研究所報告8　談話語の実態』 秀英出版.

国立国語研究所編（1995）『国立国語研究所報告112　テレビ放送の語彙調査Ⅰ』 秀英出版.

小松英雄（1981）『日本語の世界7　日本語の音韻』 中央公論社.

こまつひでお（1999）「日本語進化のメカニズム―環境への適応としての言語変化―」『国語学』196.

斎藤純男（1991）「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』第6号.

真田信治（2001）『方言は絶滅するのか　自分の言葉を失った日本人』 PHP研究所.

朱　春躍（2000）「自然会話における音素の添加、縮減と融合」 佐治圭三教授古希記念論文集編集委員会編 『日本と中国ことばの梯　佐治圭三教授古希記念論文集』 くろしお出版.

白藤禮幸（1995）「辞書のことば考」『国文学　解釈と教材の研究』第58巻第12号.

助川泰彦・前川喜久雄・上原　聡（1999）「日本語長母音の短母音化現象をめぐる諸要因の実験音声学的研究と音声教育への示唆」 アラム佐々木幸子編 『言語学と日本語教育』 くろしお出版.

立松喜久子（1986）「東京方言の「音便」を考える―音韻脱落・縮約・交代・附加―（listening ability向上のために）」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』9.

田野村忠温（2000）「用例に基づく日本語研究―コーパス言語学―」『日本語学』Vol.19No.5.

崔　絢喆（2003）『日本語の韻律構造』 風間書房.

坪井美樹（2001）『日本語活用体系の変遷』 笠間書院.

寺尾　康（1987）「日本語における助詞の言い誤りについての一考察」『常葉学園短期大学　紀要』第 18 号.

寺尾　康（1988）「自然発話に現れる音位転倒の一側面」『常葉学園短期大学　紀要』第 19 号.

寺尾　康（1993）「幼児の音位転倒に関する一考察」『常葉学園短期大学　紀要』第 24 号.

寺尾　康（2002）『〈もっと知りたい！　日本語〉 言い間違いはどうして起こる？』 岩波書店.

寺尾　康（2005）「言い間違いの「ルール」が教えてくれるもの」『言語』第 24 巻第 10 号.

寺尾　康・村田忠男（1995）「音位転換現象への音声学的アプローチ―幼児の発話を資料として―」『言語研究』第 108 号.

寺尾　康・村田忠男（1999）「２モーラ連続環境における調音可能性とその言語産出モデル研究への意味合い」『音韻研究』2 号.

轟木靖子・河野葉子（2004）「放送におけるガ行鼻濁音について―アナウンサーの意識調査に基づく考察―」『香川大学教育学部研究報告　第 1 部』122 号.

土岐　哲（1975）「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28 号.

土岐　哲（1996）「音声の指導」『日本語学の世界』（『日本語学』7 月臨時増刊号） 明治書院.

土岐　哲（2002）「日本語音声の縮約とリズム形式」 玉村文郎編 『日本語学と言語学』明治書院.

土岐　哲（2005）「音声研究と日本語教育」 松岡　弘・五味政信編 『開かれた日本語教育の扉』 スリーエーネットワーク.

中村フサ子・小泉美礼・樽田ミエ子（2003）「テレビドラマの会話に見られる縮約形の調査・分析」『東海大学紀要　留学生教育センター』第 23 号.

ネウストプニー J.V.（1982）「階層言語という壁」『言語』Vol.11No.10.

日比谷潤子（1988）「バリエーション理論」『言語研究』第 93 号.

日比谷潤子（2000）「長母音短縮現象２―ランダムサンプリング調査資料の分析―」『日本語と日本語教育』第 28 号.

日比谷潤子（2003）「海外言語学情報（11） 変異理論のこれから」『英語青年』第 148 巻第 11 号.

深澤はるか（2005）「最適性理論」 西原哲雄・那須川訓也編 『音韻理論ハンドグッ久』英宝社.

福島悦子・上原　聡（2004）「丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察―日本語

の母語話者と学習者の会話を比較して―」『国際文化研究科論集』第 12 号.

富士　裕（1972）「Final Position の /t/ をめぐる一考察」『東北学院大学論集』第 59 号.

堀口純子（1989）「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文芸言語研究言語編』15 号.

前川喜久雄（1995）「音声の言語学的モデル」『行動計量学』第 22 巻第 1 号.

前川喜久雄（2001）「音声分野における統計的研究手法―音声の変異をめぐって―」『日本語学』Vo.20No.5（『日本語の計量研究法』）.

前川喜久雄（2002）「話しことばにおける長母音の短呼―『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声変異の分析―」『国語学会 2002 年度春季大会要旨集』.

前川喜久雄（2004）「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15.

前川喜久雄・小磯花絵・菊池英明・間淵洋子・斎藤美紀（2003）「『日本語話し言葉コーパス』に捉えられた言語変異現象」 平成 15 年度国立国語研究所公開研究発表会時配布資料.

松田謙次郎（2001）「文法的変異」 ダニエル・ロング・中井精一・宮治弘明編 『応用社会言語学を学ぶ人のために』 世界思想社.

松本裕治（2003）「現代語のコーパスの種類とそれぞれの特徴」『コーパス言語学』（『日本語学第 22 巻第 5 号』）.

丸山和香子（1989）「［共同研究］女性の話しことば―テレビのインタビュー番組から―④縮約形について」『ことば』10 号.

嶺岸玲子（1999）「日本語学習者への縮約形指導のめやす―日本人による評価と使用率をふまえて―」『日本語教育』102 号.

村田忠男（1995）「調音可能性の度合いと音声の継続時間」『九州工業大学研究報告（人文・社会科学）』第 43 号.

梁井久江（2003）「「―テシマウ」と「―チャウ」の相違」『2003 年度日本語教育学会春季大会予稿集』.

山根　繁（2003）「言い誤り」 小池生夫編集主幹 『応用言語学辞典』 研究社.

ラーセン＝フリーマン, ダイアン・ロング, マイケル. H（牧野高吉・萬屋隆一・大場浩正訳）（1995）『第 2 言語習得への招待』 鷹書房弓プレス.

Corder, S. P.（1967）The significance of learner' s errors. Reprinted in 1981 in Corder. S.P. Error Analysis and Interlanguage. Oxford：Oxford University Press：pp.5-13.

Maekawa, Kikuo. (2005) Toward a Pronunciation Dictionary of Japanese: Analysis of CSJ. Proceedings of Symposium on Large-Scale Knowledge Resources (LKR2005)：

pp.43-48.

Sato, Tsutomu. (1995) Connected Speech in Japanese: Fast and Casual Speech Processes and Speech Rate I 『明治学院論叢』第 558 号：pp.21-31.

（博士後期課程学生）

（2005 年 9 月 2 日受付）
（2005 年 10 月 14 日修正版受付）
（2005 年 11 月 16 日再修正版受付）
（2005 年 11 月 24 日掲載決定）